あの星は見つからない

amin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あの星は見つからない

【Ｎコード】
Ｎ４５７３Ｔ

【作者名】
＊ａｍｉｎ＊

【あらすじ】
中学で同じサッカー部にいたのは誰もが認めるほどの技術を持った少年だった。
１年なのにスタメンに抜擢された少年が気に食わなかった吉田は毎日１－１を挑むようになった。
それから２人の奇妙な友情が始まっていく。

「いけぇ園崎！かましてやれよ！」

初めて出会ったのは中学校の時だった。小学校の頃からサッカーをやっていてＤＦ一筋で今までやって来た自分と、ＦＷとして小学校の頃から有名だった園崎。

中学では自分と違ってすぐにボールを蹴らせてもらえていた。自分はと言うと、他の奴らと一緒で最初は走り込みと基礎練。それを３週間繰り返していたらある日先輩から部内の練習試合のメンバーに入れてもらえた。

と言っても１年の実力を試す為だから１年全員入っていたんだけど、その中でも園崎はやっぱり１人だけ違った。

あの星は見つからない

園崎が蹴ったボールがＧＫの手をかすめてネットを揺らす。小気味良い音を立ててボールが地面に落ちた。

やっぱりあいつはすごい。でも嬉しそうな表情１つしないのはストイックって奴らしい。向上心が強くて現状に満足しない。やっぱこいつはすごいんだ。

「すげぇなー綺麗に決まったな。おい１年！おめぇらも抜かされんなよー！」

先輩達が笑いながら野次を飛ばしてくるから肩が跳ねた。

そんな事言われても園崎が上手いんだから仕方がない。どれだけ粘

ってもフェイント1つで抜かされてしまう。足だって速いしボールコントロールだって上手い。そんな奴に簡単に抜かされんなって言われても無理じゃないか。

「それにしても上手いっすねー園崎は。即戦力になれますって」

先輩の誰かの声が聞こえた。すごいな……1年なのに即戦力なんて。その後も試合は園崎に振り回され1－3でこっちのチームが負けた。試合の後、勇気を出して園崎に話しかけてみる事にした。今まで話した事がなかったから緊張したけど、どうしても仲良くなりたいって思った。

「園崎、お前本当にすごいんだな！」

そう声を出して後ろから話しかけ肩を叩けば、園崎がこっちに振り返った。少しびっくりした様な顔で、でも少し照れくさそうに頬を掻いた。

思ってたより悪い奴じゃなさそうだ。そう思ったけど、次に出た言葉は失礼以外の何物でもなかった。

「お前が下手なだけなんじゃね？俺そんなに上手くないし」

「なぁっ！？」

確かに園崎みたいに上手くは無い。しかしサッカー歴5年、ずっと他のポジションもせずDF一筋で頑張ってきたのに、この一言で片づけられるのは実に心外だ。

絶対こいつからボール奪ってやる！そして言わせてやるんだ、吉田は実はすごくサッカー上手いんだなって！

その日から俺の園崎に対する挑戦が始まった。

「おい園崎！１－１やろうぜ！」
「またかよ」

これで何回目かは分からない。でも今の所全敗だ。それが気に食わないのだ。こいつの鼻っ柱追ってやらないと絶対調子に乗る！それだけは許せない！
園崎は面倒そうにしながらも俺の挑戦をいつも受ける。何だかんだで断られた事は無い。
白と黒のボールを園崎が持ち、こっちに向かって走ってくる。よし、今度こそ！
園崎がフェイントをかけたけど、それを見破って、何とか体勢を戻した。向こうはもう１回しかけてきたけど、それも耐えた。でも３度目のフェイントに追いつく事が出来ず突破を許し、そのままボールはネットに吸い込まれて行った。

「また負けたな吉田」
「うぐっ……うー」

頭上からニヤニヤと嫌な笑い方をしながら馬鹿にするように声をかけて来る園崎に対して頭に血がのぼったけど、負けたんだ。何も言い返すことはできない。
もう恒例になってしまった園崎との１－１に先輩たちも笑いながら見学していた。そして俺達の１－１が終わった後に部活がスタートする。何だかんだで先輩たちも優しいし、和気あいあいした部活だった。
園崎は１年なのにスタメンで起用され、試合になると相手陣営をそのドリブルとシュートで翻弄した。俺はスタメンどころかベンチに入る事も出来ず、スタンドからの応援だったけど、こんなすごい奴と自分は毎日１－１してるんだと思ったら、何だか誇らしかった。

大会も終わり、3回戦で負けた俺達は部室に集合する。そして先輩たちが部活を引退するのでお別れ会なるものをやった。
一生会えなくなる訳でもないのに、なぜか悲しくて泣く奴もいっぱいいた。勿論俺も泣いた。でも園崎は泣かなかった。

「泣けよ、感じ悪いな」
「何でだよ、別に泣くほどの事じゃないだろ」

嫌味な奴、まぁ泣いてない奴だって何人かいる。園崎だけを責める必要はないんだけど。
新たに部長になった2年生の先輩がかけ声をかけて新生サッカー部がスタートする。来年こそはレギュラーになれなくてもベンチぐらいにはなりたいな。

――――――――――――――――――――――――――――――

―――――

「げっ」
「おー園崎じゃねぇか」

季節は過ぎて2年生になった時、園崎と一緒のクラスになった。本人は嫌がったけど、こっちは何だか嬉しかった。同じクラスにサッカー部の奴もいないし、俺も仲が良かった奴らと皆クラスが離れてしまった事から、その日から自然と教室でも園崎とつるむようになった。
向こうも慣れてしまえば普通の男子生徒だ。宿題を忘れて助けを求めてきたり、テスト勉強一緒にやったり。勿論毎日1ー1をした。未だに勝てなかった。
だがその頃から園崎はますますサッカーが上手くなった。サッカー部の中に園崎に敵う奴はいなくなっている程だった。この部活にいるよりはクラブに行った方がいいんじゃないかって先輩たちも言っ

てたけど、園崎はそれを頑なに拒否した。少し悲しそうな顔をして。

「何で嫌がるんだ？ここでやっても物足りねぇんじゃねぇの？」

「だってクラブって金かかんじゃん」

なんだよ、そんな理由かよ。

そして3年の引退がかかった中体連が始まった。園崎は相変わらずスタメンで、俺はなんとかベンチに入れた。フルではないが試合にも何度か出させてもらった。

園崎の前を走る奴は誰もいなく、風を切るように走る園崎はなんだかすごく楽しそうに思えた。

それでもやっぱり強い所と試合したら負ける。俺達は去年からは1試合進歩した4試合目で負けた。それがとても悔しかった。

今の3年の先輩達と2年間も一緒に部活をしてきた。引退してほしくなかったから優勝して次の大会に行きたかった。でもそれが叶わなかったのだ。

そしてお別れ会の時、俺達2年生は全員で泣いた。園崎も少しだけ泣いた。

新しい部長を決める時、皆が園崎を選んだのに園崎はそれを拒否して部で一番のしっかり者に部長を任せた。

そいつも他の奴らも驚く中、園崎は柄じゃないからって言って部室を出て行く。でもこれで俺達が最上級学年になってしまった。これからは俺達がサッカー部を引っ張らなきゃいけないんだ。

皆で一生懸命練習した。先輩達が教えてくれてた方法を受け継いで1年にも教えて行った。

その頃から園崎はこの地区では有名になっていた。凄く上手い選手がいるって意味で。高校だって推薦で通るだろうってその時から言われてたから。

その日、日課になっていた１－１を部活が終わった後にやった。相変わらず園崎は上手くてボールを取ることはできなかった。
疲れてへたり込んだ俺を余所に園崎はまだ余裕そう。くそっ！本当にうますぎてムカつく奴だ。
でも園崎はボールを籠の中に戻し、こちらに近づいてきた。

「園崎？」
「高校さ、高城に行こうと思ってるんだ」

高城って言ったらこの県でも有名なサッカー強豪校だ。実際その高校からプロの選手を何人も輩出してるほど。そうか、こいつはプロになりたいのかな。
驚きは来なかった。こいつの上手さをこんな狭い地区で押さえつけるのはもったいないと思ったから。クラブにも行かず、部活だけでこんなに上手いんだ。本格的な練習ができる強豪校に行ったら、きっと今よりも上手くなれる。

「サッカー本当に好きなんだよなーお前」
「まぁね、それ以外に取り柄もねーもん俺」

そう言って笑った園崎は本当に楽しそうだった。
それからまた季節は過ぎて俺達は3年になった。クラスは離れてしまったけど、部活で毎日顔を合わすから気にはならなかった。その頃には俺も1年の時に比べれば上達し、スタメンを任されるほどになった。園崎に関しては説明する事も無い。
あいつを止められる奴はいないんじゃないかって活躍ぶりだった。
高校のスカウトの人達も来てたって聞く程だったから。
そんな園崎を率いていても、残りが俺達平凡なサッカー少年だったから、相変わらず優勝はできなかった。最後の大会だったから悔しかったけど、でも悔いは残らなかった。楽しかったのは事実だった

から。

2年生に部長を任せて最後の集会をする。今まで退部していった先輩達はこんな気持ちだったんだろうな。こりゃなんだか悲しいや。グスグス泣いて上手く言葉が話せない俺を誰よりも励まし笑っていたのは園崎だった。

それから暫くは時折部室に顔を出したりしてたけど、受験勉強が本格的に始まってからは皆来なくなった。その日から毎日続いてた園崎と1ー1はしなくなった。

園崎は推薦で高城に決まったらしい。廊下ですれ違った時話してたあいつはすごく嬉しそうだった。

「お前高校行ってもサッカーやれよ。叩き潰してやるからよ」

相変わらず喧嘩口調だったけど、その言葉を聞いて高校生になってもサッカー部に入ろうと思った。

そして仮卒の日も過ぎて、受験にもスパートをかける。卒業式はボロボロ泣きながらも、皆受験が1週間後に控えてたから気が気じゃなかった。でもそのお陰か、何とか第1志望の高校に合格が出来た。受験に受かった日、俺は園崎を呼びだした。

「最後の1ー1だ。受けるよな」

「うっぜー。まぁいいけどよ」

ボールを持って走り出した園崎を止める為に俺も走った。

その日は今までで一番自分の中で健闘したと思えた。結果としては抜かされてしまったけど、それでも3分間ぐらいは粘り続ける事が出来たから。

園崎も少しだけ肩で息をしており、園崎を少しは見返せたんだと思った。

そのまま何かを話す訳でもなく俺達は笑った。意味も無いけど、何だか可笑しかった。

「あーぁ、結局3年間お前に1回も勝てなかった」
「お前に抜かれたら終わりなんだよ」
「うっせぇ馬鹿！高校頑張れよ。そんでプロになれよ。有名になったらサイン貰いに行くからな」
「1番に書いてやるよ」

2人でベンチに座って休憩しながら色んな話をする。
高校生活楽しみだけど少し怖いな、とか。勉強ついて行けるかなー、とか。下らない事ばかり。
その時、園崎が空に指を指した。

「お、夏の大三角」
「どれだよ」
「あの一番光ってる3つ」

園崎が指を指したのは3つの星。キラキラと輝いている。つか目立ってるんだよな……この3つを繋げて夏の大三角と言うらしい。

「すげぇ目立つな」
「俺いつかあんな感じで目立ってやるから。サッカーで」
「例えがきめぇよ！」
「あはは！」

でも園崎ならあの星みたいに誰もが振り返る様な存在感のある選手に慣れるんじゃないかなって心のどこかで思った。
その日、園崎と俺は別れた。それから連絡もほとんど取らなくなった。お互いに初めての高校生活に慣れる為に色々大変だからって勝

手に思い込んでた。
高校に入ってから、俺はサッカー部に入った。生憎ここのサッカー部は強い訳じゃなく、楽しく部活をしよう的な感じだったけど、下手糞な自分にちょうどいいレベルの緩さで中学同様楽しかった。先輩達も優しかったから。
友達も出来て、それなりに充実した毎日を送っていた。
そして大会が始まった。勿論俺はレギュラーではなくスタンドからの応援で、１回戦は平日で学校があったからスタンドの俺は公欠を取れず、ただ試合の結果ばかりを気にしてた。
でも１回戦は勝ったと言う報告のメールが来て、授業中なのに飛びあがりそうになった。次の試合は休日、俺も応援に行けるし、次はシードの高城と試合なのだ。つまり園崎の姿が見られるんだ。
相手は強豪校だ。いくら園崎でもスタメンを取れるかは分からないけど、でもあいつならベンチくらいは絶対にいるはず！
そう思ったら、早く休日が来てほしくて仕方がなかった。

２回戦、スタメンで起用されていた園崎を見つけて、腰が抜けそうになった。あいつはたった２カ月足らずで強豪校と言われる部活の中でレギュラーを勝ち取っていたのだ。
園崎の表情は真剣そのもので、中学の頃よりもまた更に上手くなっていた。園崎に２点を入れられてうちの高校は３－０で負けた。話しかけようと思ったのに、園崎はそのまますぐ奥に引っ込んでしまった。なんだよ、つまんねぇ奴。
でもその日メールが来た。相手は園崎で、公園で話がしたいって書いていた。

公園とか懐かしいな。俺が最後に園崎に勝負を挑んだ場所じゃないか。結局勝てなかったけどな。
約束の時間に自転車を漕いで公園に着いたら、既に着いていたらしい園崎が缶コーヒーを飲みながらベンチに座っていた。その隣には

サッカーボールがある。あ、こいつ俺と勝負する気だな。上手くなったってのを自慢したいんだなこいつ！

「園崎！」
「お、吉田。おせぇよ馬鹿」
「んな事より勝負だ！」
「言うと思った」

園崎は笑ってボールを手に取った。どれだけ強くなったかを確かめてやる！
走り出してボールを取ろうと足を伸ばすけど、難なくかわされた。
そのまま向こうも突破しようとしたけど、そうは問屋が許さない。
俺も何とか踏ん張って、再び足を出せば園崎は後ろに下がった。

「相変わらずしつけぇディフェンス」
「どうだ！」

その後も3分程度攻防は続いたけど、結局また負けた。あーくそ！
もう一生こいつには敵わないのか！？
やっぱすげぇな。そう言おうと振り返った先には悲しそうな園崎がいた。公園の蛍光灯に包まれて表情全てがはっきり分かる訳ではないけど、悲しそうな顔をしているのだけはすぐに分かった。

「園崎？」
「やっぱさ、楽しいよ。お前とサッカーするの……いや、中学でサッカーするのは楽しかった」

意味が分からなかった。その言い方だと今がつまらないとでも言うんだろうか。あんな強豪校でスタメン勝ち取って、あんなに活躍してたのに。

園崎はボールを軽くリフティングしている。やっぱりその姿は少し寂しげだった。その姿を見た時、ふと中学生の時、部活じゃ物足りないだろうからクラブに行かないのか？って聞いた時の表情と被った。

「なぁ、前さ……部活じゃお前止めれる奴いないからクラブに行けばって言った事あったじゃん。なんであんな嫌がったんだ？」

園崎の動きが止まって地面に落ちたボールは俺達から離れて行く。もしかして地雷に触れてしまったんだろうか。

「楽しくないから」

「え？」

「元々クラブ出身だよ俺。でも楽しくなかったから止めたんだ」

「楽しくないって……」

意味が分からなかった。クラブの雰囲気が悪かったのか、それともサッカーが楽しくなかったのか。恐らく前者なんだろう、そしてもしかして高校の部活もきついのかもしれない。でもスタメン取ってたし、順風満帆に行ってるようにしか見えなかったけど。

「俺、サッカーが好きだ。でも違ったんだ。クラブじゃレギュラー争いは激しいし、勝つ為のサッカーにこだわる。俺はもっと楽しいサッカーがしたかった」

「……」

「だからサッカー選手になりたいって夢は諦めた。中学では楽しく出来りゃいいやって思った。でも中学の部活が楽しかったんだ。お前と１－１すんのも、先輩達と一緒に練習するのも。またさ、サッカー選手になりたいって思って来ちまったんだ。こういうサッカーをしたいって」

「園崎……」
「でもさ、高城は違う。クラブと一緒だ、勝つ為のサッカーにこだわり過ぎて楽しくない。でももうサッカーを諦めたくないって気持ちもあるんだ。だけどあの場所にいても楽しくない。好きなサッカーが嫌いになりそうで怖い」

辛そうに語る園崎にかける言葉が見つからない。園崎みたいに上手い奴に俺が何を言ってやれるって言うんだ。
地面にポタリと雫が落ちて、なんだかこっちまで釣られて目に涙が溜まっていく。

「もう一度、中学に戻れたらなぁ……あの時のまま、時間が止まってくれたらいいのに。お前と1－1をずっと出来てたら良かったのに」

園崎は俺達のずっと前にいる、そう思ってた。でも園崎は俺達と一緒に走る事を望んでた。
夢を捨て切れずに、今の現実に慣れる事が出来ず、園崎は苦しんでる。止めてしまえばいいのに、そう思ったけど、園崎にプロになれって言ったのは俺自身だった。
結局何も言う事が出来ず2人で泣くだけだった。

「俺、今もサッカーが好きだ。でもお前や皆でやった中学の時のサッカーの方がもっと、好きだった」

お互い下を向いてたせいで夜空の星は見えない。あの時、2人で話した時の星がどこにあるかすらも分からない。
俺1人じゃその星すらも見つけられないだろう。

あの星は見つからない。

あの星さえあれば、あの時を思い出して笑いあえるかもしれないのに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4573t/

あの星は見つからない

2011年10月5日22時15分発行